



巻頭言 外科医がいなくなる？

副院長 池田 義毅

産科の医師不足が叫ばれて久しいが、ここ数年「花形」ともいえる外科医の減少が目立っている。長時間に及ぶ手術や当直など勤務状況が過酷であるにもかかわらず、報酬はそれに見合わないことなどを嫌い、若い医師の外科離れが進んでいるという。厚労省の調査によると、平成18年までの10年で医師総数は約15%増えた一方、外科系は約8%減で、これまで医師不足が指摘された産婦人科の約6%減よりも減少幅が大きい。

外科医の中でも29歳以下の若手医師数をみると、平成16年の医師数は2,184人で平成8年の調査に比べて1,000人以上も減少している。日本外科学会は「このままでは近い将来、深刻な外科医不足が起こることは避けられない」と危機感を強める。同学会が実施した平成18年の調査（複数回答）によると、志望者の減少理由として「労働時間が長い」（71.9%）がトップ。これに「医療事故のリスクが高い」（68.2%）、「訴訟リスクが高い」（67.3%）、「賃金が少ない」（67.1%）が続く。また病院に勤務する外科医の週平均労働時間は労働基準法が定める時間を大幅に上回る69時間。一方、診療所の医師は48時間。しかし、勤務医の収入は診療所の医師に比べ約2分の1にとどまっている。

医学生から見ると、外科は3K職場であり、また技術習得に何年もかかる（一人前になるのが遅い）こともあり、どんどん志望者は減っているのだそうだ。私自身の大学病院時代を振り返ってみても、本当に「仕事だけ」だった。当時はそれも「外科医を選んだ以上

は当たり前」と思っていたから、あまり考えもしなかった。朝7時には病院に着き、受け持ち患者さんを通り回診。7時30分から術前カンファレンス。9時から手術、外来、検査等の通常勤務、急患でも入ればその対応も行う。夕方からは術後カンファレンス、その後グループ毎に受け持ち患者の検討を行う。グループ内にレジデントがいる場合は、彼らのプレゼンのため、その指導もしなければならぬので、時間はエンドレスとなる。土、日曜日にも不文律であったが、午前中、病院へ行き回診した。「病院へ行かなかった日」というのは夏休み2週間以外には数日しかなかった。今振り返ってみても、本当にとんでもない勤務だったと思う。

外科はある意味「職人」の世界であり、技術習得には徒弟制度的なものもある程度必要なことはわかっているが、このような「個人の犠牲」の上に成り立つ医療は、本当の医療とは言えないと思う。当然、家族はその「しわ寄せ」をもろに受けることとなった。かみさん、子供たちには本当にかわいそうな思いをさせたと思う。

早いもので大学を離れて20年が過ぎた。現在は十分な家族サービスをしているとはとても言えないが、「家族を犠牲にしている」という負い目は無くなったと感じている。最後に、若手外科医の勤務体制と働く環境を変えなければ、本当に外科医がいなくなる日が来るかもしれない。

肺がんキヤンサーボード

呼吸器内科 吉森 浩三

キヤンサーボード (Cancer Board) とはがん患者の状態に応じた適切な治療を提供することを目的として医療機関内で開催される検討会と定義されています。そして集学的治療や標準的治療等を提供する際に手術、放射線療法及び化学療法に携わる専門的な知識及び技能を有する医師その他の専門を異にする医師等によるがん患者の症状、状態及び治療方針等を意見交換・共有・検討・確認等するためのカンファレンスとされています。

集学的治療が必要なケースについては、関連診療科が中心となって討論し、手術、抗癌剤治療、放射線治療、分子標的治療などによる最適な集学的治療をいかに計画・実践していくかを学ぶことを目的としています。そして質の高いがん医療の効率的な提供体制を確保することが重要であります。

当院では2008年7月4日に第一回肺がんキヤンサーボードを開催し、以後毎週金曜日午前8:15よ

り行っています。構成メンバーは呼吸器外科医、放射線科 (治療、診断) 医、呼吸器内科医、薬剤師、理学療法士です。

また、当院は2012年4月に東京都部位別がん治療連携病院に認定されました。

地域がん診療連携拠点病院の指定要件の中で、集学的治療の提供体制及び標準的治療等の提供の項で“がん患者の病態に応じたより適切ながん医療を提供できるよう、キヤンサーボードを設置し、定期的

に開催すること”とされています。現在、複十字病院は毎年年間200人余りの肺がん新患者を迎え、肺がんキヤンサーボードにより手術、放射線療法及び化学療法を効果的に組み合わせた集学的治療及び緩和ケアを提供し、診療ガイドラインに準ずる標準的治療、最新医療等がん患者の状態に応じた適切な治療を提供することを実践していきます。

国際肺音学会に参加して

リハビリテーション科 山根 主信

2013年11月14～15日に京都ガーデンパレスホテルで開催された国際肺音学会で演題発表をさせていただきました。学会には国内はもちろんアメリカ、ロシアなど海外からも肺音を研究されている先生方が沢山参加されていました。英語の飛び交う学会では話の内容を理解するのが難しいことも多々ありましたが、様々な研究を聞き「肺音」の奥深さを改めて感じる事ができました。また、学会の企画の中に「南禅寺」観光もあったため、紅葉し始めた京都をゆっくりと眺める機会までいただきました。

今回の発表にあたり、看護師、呼吸器内科の医師、理学療法士の方々には研究のデータ収集にご協力をいただきました。また工藤院長には発表原稿にアドバイスをいただき、発表練習にも夜遅くまでおつき合いをしていただき、質疑応答の際もサポートをしていただきました。初めての英語発表はとても不安が大きかったのですが、当院のみなさんに協力をしていただいたおかげで今回の発表をすることができたことにとっても感謝しております。そして発表を終え、確かに国際学会での発表はハードルが高くて準備も大変ですが「挑戦してよかった!」と思いました。

次回の国際肺音学会は今年の10月にアメリカのボストンで開催予定です。聴診に関する意義ある研究を続け、できればまた発表できるように頑張りたいと思っています。



アメリカ胸部学会誌 (Annals ATS) 新年号の表紙を 複十字病院が飾りました

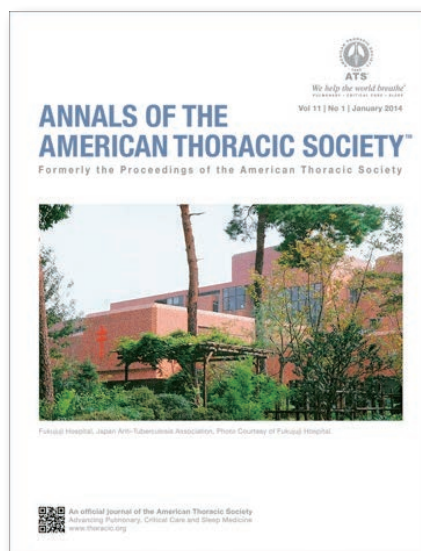
ORIGINAL RESEARCH

A Steady Increase in Nontuberculous Mycobacteriosis Mortality and Estimated Prevalence in Japan

Kozo Morimoto¹, Kazuro Iwai², Kazuhiro Uchimura², Masao Okumura¹, Takashi Yoshiyama¹, Kozo Yoshimori¹, Hideo Ogata¹, Atsuyuki Kurashima¹, Akihiko Gemma³, and Shoji Kudoh¹

¹Respiratory Disease Center, Fukujuji Hospital, Japan Anti-Tuberculosis Association, ²Research Institute of Tuberculosis, Japan Anti-Tuberculosis Association, and ³Division of Pulmonary Medicine, Infectious Diseases, and Oncology, Department of Internal Medicine, Nippon Medical School, Tokyo, Japan

森本耕三先生（呼吸器センター内科）の論文が、アメリカ胸部学会誌に掲載され、表紙を複十字病院が飾りました（Morimoto K, et al: Annals ATS, 2014, 11 (1), 1-8）。論文は日本における非結核性抗酸菌症死亡の増加と推定有病率に関する研究です



本邦では肺非結核性抗酸菌症治療の標準薬剤（クラリスロマイシン、リファンピシン、エタンブトール）は、1990年代後半に海外で広く用いられるようになってから実に10年以上を経過して、2008年以降ようやく保険適応となりました。この疾患の重要性が認識されていなかったことが問題であり、我々は種々の方法で情報発信を続けています。この論文は、どれだけ沢山の方が重症となっているか、またその数が増え続けているのかを人口動態統計などを用い、実数として示した初めての報告となっています。昨年10月に雑誌編集長から論文採用の知らせと共に表紙に使う写真を提出するようにとメールが来ました。何にしようか考え、当院の写真を使わせて頂きました。英文医学雑誌の表紙に日本の病院が載るのは初めてのことだそうです。この病院の設計をされた方が「宝石のような病院の建物を作りたい」と話されていたと後日教えて頂きました。

森本 耕三



クリスマス・ハートフル・コンサート開催

● 2013年12月17日（火）午後7時より当院新外来待合室にて、恒例のハートフル・コンサートが開催されました。ハートフル・コンサートは、みき音楽事務所さんのご厚意により毎年2回開催されています。今回は、東京都立総合芸術高校の女子高生4人組が、ピアノ、打楽器、歌を交え、クリスマスソングや懐メロなど約10曲、患者様は楽しい癒しのひと時を過ごすことができました。



ホワイトクリスマス
アメージンググレイス
りんごの歌
川の流れのように 他



第9回院内発表会を終えて。

実行委員長 **生形 之男**

2013年12月14日に第9回院内発表会が結核研究所講堂で行われました。今年は各部署、委員会より33演題の発表、教育講演（約1時間のセクハラ、パワハラに関する講義）、放射線防御委員会のポスター掲示が行われました。約半日の長丁場でしたが、皆さまお疲れ様でした。また、予防会本部や新山の手病院からも多数の方に参加して頂きました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

今年も優秀賞5題が審査員によって選考されました。優秀賞の発表は懇親会の途中で行われるため、アルコールも入り皆さんあまり覚えていないかもしれませんが、以下の5演題が選ばれています。

| | | |
|-------------|------------------------|-------|
| みどり保育園 | 「みどり保育園」歴史的使命を終えるにあたって | 依藤 ミネ |
| 放射線技術科 | 低線量肺がんCT検診の撮影条件検証 | 山田 真如 |
| 手術室 | 消化器外科における手術部位感染対策に実践 | 田中 裕美 |
| 緩和ケア診療科 | 緩和ケアチーム活動の報告 | 小林 潤子 |
| 呼吸ケアリハ推進委員会 | 「HOTの会」参加者数増加のための取り組み | 高尾 聡 |

全部署毎年発表のコンセプトで始まった院内発表会も吉山先生が委員長となり、各部署毎に2から3年毎の発表となり、発表と質疑応答の時間を増やす方向性が打ち出されました。今回の院内発表会でも、プログラム担当の内山先生の配慮により演題数を昨年の37から33に減らし、休憩時間を10分から15分に増やすことができました。また、発表時間や討論時間も十分にとれたと思います。

発表内容やプレゼンテーションの方法も年々レベルアップしています。次回の院内発表会にも数多くの職員が参加されることを願ってやみません。

最後に、ご協力頂いた各係の職員の皆様にお礼申し上げます。

懇親会料理発表

栄養科 **川崎 由香理**

栄養科調理師からの発表は、懇親会でのお料理でした。みなさま楽しんでいただけましたでしょうか？

栄養科からの料理発表は、「第1回目院内発表会」が最初でした。初回は、工場裏から竹を切り出したり、竹で作った食器を取り寄せたりと演出にも気合を入れたのを思い出します。第1回・第2回と2年続けて行ないましたが、どちらも元和食職人の調理師が中心に職人技を披露してくれました。

今回、「第9回院内発表会」懇親会への参加は、それから6年目の昨年に引き続きの発表でした。当時とは職員も入れ替わり、洋食経験者もおりますので、和洋折衷おつまみからデザートまで楽しんでいただけるメニューを用意いたしました。

8月末からメニュー検討を始め、当日が近づくと遅い日には21時過ぎまで準備したお料理に、愛情を感じていただいたのではないのでしょうか。当日は患者食提供に支障がないように勤務表を組んで、5時頃からラストサポートをかけてくれるスタッフを誇らしく思います。

病院食は、必ずしも味だけを求めるものではなく、治療の一環です。栄養士が院内食事箋に沿った献立を作成し、調理師は献立に従い調理しなければなりません。日常業務では出し切れない技術や調理師という本来の料理の楽しさを満たしつつ、みなさまにも喜んでいただければ幸いです。

このような場を与えてくださった院長はじめ、関係者の方々に感謝いたします。

また、同じように患者食にも、心を込めて喜んでいただけるお食事を提供していきたいと思っております。



2013年 一口会席・大人のお茶漬・餃子・粕汁・シューサンド(さんまパテ入り)・
メニュー ガトーショコラ・カシスソルベ・マドレーヌ・ロシアンルーレット

みどり保育園卒業にあたって

みどり保育園は多くの方々に支えられ共に守ってきた保育園です。昭和41年頃、自主運営から無認可保育園へ、そして平成2年院内保育所へと幾度かの過渡期を経て40数年が過ぎました。当初から夜間保育を行っている保育所は清瀬では唯一の保育所で、乳児を中心に保育してきました。一番母親を必要とする時期でサポーターとして愛情をそそぐ事、0才～3才までの基本的な生活習慣（食事や睡眠、排泄指導）を重点に保育して参りました。

また、健康でよく遊ぶ子を保育目標として戸外遊びを中心に日々過ごしました。数えきれない程のお子さん、そして父兄の皆様とのふれ合いの中で思い出を沢山いただき、また、元気な子供達と汚れない可愛い笑顔に癒され、この仕事を長く続けてよかったと思うこの頃です。

4月からは装いも新たに認可保育園として、どろんこ会に引き継がれる事となりました。支えて下さった多くの方々、いつもはげまし応援して下さいました方々に感謝をして、みどり保育園は卒業致します。長い間御支援ありがとうございました。

平成26年3月 依藤 ミネ



初代スタッフ 1971年頃



中期 1989年頃のスタッフと子供達



みどり保育園卒業集合写真 2014年2月

47年間にわたって職員の働く環境を支えて下さった「みどり保育園」が、この4月から複十字病院（結核予防会）、「社会福祉法人どろんこ会」、「清瀬市」の3者が協力して、清瀬の地域に開放された新たな保育園「どろんこ保育園」に引き継がれます。依藤先生はじめ保育士の皆さん、長い間、本当にご苦労様でした。

これまで、清瀬市内には市立保育園7園（清瀬市が設置運営）、公設民営保育園1園（清瀬市が設置し社会福祉法人に運営を委託）、私立保育園5園（社会福祉法人が設置運営）の合計13の保育園がありました。2014年度、清瀬市は「待機児童ゼロ」を目指して、認可保育園の施設を増やし、保育定員を114人増やします。「みどり保育園」の敷地と建物を引き継ぐ、「どろんこ保育園」はその一つです。新しい「どろんこ保育園」では、複十字病院の職員の児童は、これまでの「みどり保育園」と同様に受け入れられます。看護師や介護士など医療と福祉に従事する女性がとても多い「きよせ」には、24時間365日運営される保育園が求められています。「どろんこ保育園」が、「みどり保育園」の伝統を引き継ぎ、さらに地域に開かれた保育園として発展することを期待しています。

院長 工藤 翔二



new! 新 医師の紹介

院長補佐



ごとう はじめ
後藤 元

(前 杏林大学医学部長)

4月に入職させて頂きました後藤元です。どうぞよろしくお願いいたします。

私は昭和48年に大学を卒業し、東京大学医科学研究所内科に入局しました。当時医科研内科の半分は結核病棟であり、結核診療が医師としてのスタートでした。小川培地を自分たちで調製していた時代です。CTの遙か以前、主役であった断層写真を囲み、先輩医師とdiscussionを重ね、学会分類、学研分類をカルテに記載していた日々をつい昨日のこのように思い出します。

やがて、結核病棟は閉鎖されることになり、結核を担当されていた先生は大学を去られました。その先生から、長年収集してこられた肺結核のX線写真を託されました。以来30年が経過しました。機会ある度に、このX線写真を若い医師に提示してきました。色褪せはしましたが、大切に保管してきたX線写真を携えて、この度複十字病院に奉職することになったことに、私なりの感慨を覚えています。

医科研に引き続き、東京都立駒込病院呼吸器内科、杏林大学医学部呼吸器内科で仕事をし、参りました。特に、杏林大学は、同じ多摩地区にあり、この地区の先生方、登録医会の先生方とは、研究会などを通じて、ご一緒する機会も多く、大変お世話になってきました。

これからは、複十字病院の一員として、さらにお世話になりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

糖尿病・生活習慣病センター長



おいかわ しんいち
及川 眞一

(前 日本医科大学教授)

メタボ系の解消に努めている65歳の医師です。

専門領域は体型と同様に糖尿病、脂質異常症、肥満症といったいわゆる生活習慣病です(私の血糖値は正常です-念のため)が「見る(診る)は易く、行う(治療する)は難し」です。診ることは容易ですが、己の病態を自由にコントロールできないほど、治療学としては困難な領域と思います。工藤病院長のご意向で仲間に加えて頂けること感謝し、また、喜んでいきます。

甲子園を目指し、球拾いに明け暮れたあの時代ほどの情熱は今、どこにある?と自問しています。少しはあるぞ、と言いたいのですが、皆様と一緒に目標に向けて「黙々」と進みたいと思います。東北人は寡黙ですから。

皆様にはいろいろとご指導を頂きながら、責を果たしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



まつだ しゅういち
松田 周一

- 配属先/呼吸器センター 呼吸器内科
- 出身地/三重県四日市市

【出身大学、卒業年】

三重大学 2010年卒

【大学卒業後の主な経歴】

2010年 浜松医療センター初期研修医

2012年 浜松医療センター呼吸器内科

【専門医・認定医資格】

日本内科学会認定内科医

【趣味及び特技】

登山、旅行、ラグビー

【患者様へのメッセージ】

初心を忘れず、日々誠意ある診療を心がけていこうと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

清瀬消防署と合同消防演習を 実施して

あのハイパーレスキュー隊が清瀬に来る!!

防災委員会 庶務課 瀧口 竜太

去る2014年3月4日（火）に清瀬消防署と「春の火災予防週間」の時期にあわせて合同演習を実施致しました。

まず始めに演習にご尽力していただいた東京消防庁並びに清瀬消防署の方々、そしてご協力いただきました病院職員の方々、そして多くの見学に来ていただきました近隣住民の方々、この場をお借りいたしまして、本当にご協力ご参加ありがとうございました。

今回は2月上旬に消防署から連絡を頂き、本番までの期間が非常にタイトであった事に加えて、消防署との打合せを重ねていく中で、今回の演習が通常の合同演習ではなく、清瀬消防署も近年多発している病院火災の現状を踏まえて非常に気合いの入った、大規模訓練である事が判明して、病院職員の方々と説明会を数回行う内に、本当に実現可能なのか内心は心臓バクバクの思いでした。

想像の中で蓋をあけてみれば清瀬周辺の消防隊やレスキュー隊及び消防隊は総勢11部隊、消防車両は当日混乱していた私が数えた限りでは13台も来院し「消防出初式」かと錯覚さえしました。皆様は、覚えていますでしょうか？あのニュースでよく見た福島第一原発に当時被せるように上から放水していたキリンみたいな車両（正式名屈折放水塔車）も奇跡的に来てくれました！

当日は天候にも恵まれ、病院職員も演習を無事終えて、消防隊の演習が始まってからは、自分も童心に帰り、普段見る事が出来ない消防車両や映画バックドラフト並みの消防士の迫真の消防活動にただただ感動していました。（次回は音響にも力を入れて迫力を出してみようかなと考えています！）

今回の演習を通して、病院火災の学びべき多くの点を消防士の方々にご教示いただき、また多くの反省点も浮き彫りになったため、今後起きえる可能性がある首都直下型震災に向けて、より一層訓練を重ねていければと思います。



複十字病院の「理念」、「基本方針」が改訂されました。

複十字病院の理念

複十字病院は、等しく質の高い温かな医療と看護を提供するとともに、医療連携を推進し地域社会が求める包括的な医療の実現を目指します。

● 病院運営の基本方針 ●

1. 呼吸器疾患、がん、生活習慣病を柱とした質の高い温かな医療と看護の充実を図る。
2. 国の高度結核専門施設、東京都（肺がん、大腸がん、乳がん）診療連携協力病院としての役割を果たす。
3. 複十字病院登録医会を中心に医療連携を推進し、在宅医療、救急医療、災害時対応など地域医療に貢献する。
4. 健診事業を発展させ、疾患の早期発見と予防医療を推進する。
5. 複十字病院『患者権利章典』を尊重する。

人事異動

2013年12月15日～2014年3月14日まで

【採用】

(看護師) 大島 すやか 2/1

【退職】

(看護師) 高澤 奈美江 1/14
(看護師) 三浦 明子 1/14
(看護師) 片倉 麻衣 1/31
(医師) 田中 さゆり 2/14
(看護師) 馬場 美雪 2/28
(看護師) 石黒 清美 3/14
(看護師) 関川 実咲 3/14

行事予定

1. 複十字病院新人オリエンテーション

日時▶2014年4月3日(木) 13:00
場所▶複十字病院 講堂

2. ほろよいず 春のコンサート

日時▶2014年4月23日(水) 19:00
場所▶複十字病院 新外来待合

3. 登録医会第12回総会

日時▶2014年7月5日(土)
場所▶結核研究所 講堂

*総会の詳細は、後日ご案内いたします。

清瀬地区学術講習会開催

2014年3月6日(木)午後7時20分より結核研究所講堂にて、ノバルティスファーマ株式会社共催、複十字病院登録医会後援「清瀬地区学術講習会」が開催されました。

当日は約50名の方がご参集くださり、盛会に終了いたしました。

演者及び演題は下記のとおりです。

講演

「呼吸器感染症をどう治療するか? ～耐性化からみた考え方～」

演者

杏林大学医学部 呼吸器内科 教授 後藤 元 先生



学会報告会開催

2014年3月12日(水)午後5時半より当院講堂にて、教育委員会主催の「2013年度 学会報告会」が開催されました。演者及び演題は下記のとおりです。

1. 「運動療法時の正確な酸素投与」 リハビリテーション科主任 桑原 陽子
2. 「非結核抗酸菌症に対する集学的治療」 呼吸器センター長 白石 裕治
3. 「非結核抗酸菌症に対する内科的所見」 臨床研究アドバイザー 倉島 篤行

編集後記

2014 FIFAワールドカップが6月12日から、ブラジルで開催されます。ボールがラインを割ったかどうかの判定に「機械の目」として、ビデオ判定・ホークアイと・ゴールレフ(GoalRef)システムを導入。スポーツと同様、医療の機器も進化していますが、機械任せでなく、それを扱う人間の判断も大事になってきますね。(M)

表紙の写真

清瀬から西武線で一直線。秩父「美の山公園」の4月は満開の桜。“吉野の千本桜”に喩えられるとか。そこで見つけたもう一つの見ものは山吹の群生。黄色の世界が、こんなに美しいとは知らなかった。(翔)